



Title	近世期日朝対訳資料の研究 — 「隣語大方」を中心に —
Author(s)	金, 文姫
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (金 文 姫)

論文題名

近世期日朝対訳資料の研究 - 「隣語大方」を中心に-

論文内容の要旨

本論文は、近世期の日本語と朝鮮語の対訳資料、とくに江戸から明治にかけて日朝両国において最も広く用いられた資料のひとつである「隣語大方」について、文献学的考証と言語学的分析をおこなったものである。

第2章では、近世期におこなわれた日本語および朝鮮語の対訳資料、とくに日本において成立した朝鮮語学書について概観した。近世期の日本においては、主として対馬および薩摩苗代川において朝鮮語の学習がおこなわれたが、対馬および薩摩苗代川において成立・伝来した朝鮮語学書の「全一道人」、「朝鮮語訳」、「交隣須知」、「隣語大方」、「講話」、「物名」、「韓語覚書」、「韓語訓蒙」、「漂民対話」、「惜陰談」、「和韓問答」、「韓讀集要」、「対談秘密手鑑」などをとりあげ、その書誌的事項と先行研究について確認した。

第3章では、近世期の日朝対訳資料のうちから「隣語大方」をとりあげ、その所拠資料たる「韓讀集要」との照合を通じて、文献学的考証をおこなった。まず、「韓讀集要」について、歴史記録類との照合を通じて、所収書簡の成立年や発信者等の考証を実施した。すなわち、「韓讀集要」の文例にあらわれる「対馬島失火」「天銀事」等の事件や「敏甫」「子淳」等の人物名を手掛かりに、その文例の成立年、発信者等を明らかにした。つぎに、「隣語大方」と「韓讀集要」の文例を逐一照合し、すべての対応例を明示し、「隣語大方」巻4（朝鮮刊本）の文例の多くが「韓讀集要」に由来するものであることを指摘した。この検討・考察により、従来未解決であった「韓讀集要」の文例の成立過程が解明され、「隣語大方」の文例の歴史的淵源の一部が具体的に明らかになったと信じられる。

第4章では、「隣語大方」の言語学的検討として、日本語および朝鮮語の人称代名詞の使われ方を、文末語尾の丁寧度との対応の観点から分析した。

従来、近世期の日朝対訳資料に基づいた人称代名詞の研究は、もっぱら朝鮮の倭学訳官と日本人との対話を内容とする「捷解新語」を対象としておこなわれてきたが、その他の諸資料についても順次検討を加えていく必要がある。本章ではその一環として「隣語大方」を取り上げ、資料の性格の違いによって、従来とは異なった方法で分析した。しかしながら、「隣語大方」は断片的な文例を無秩序に羅列したものでストーリーがないため、本章では、話し手・聞き手との関連から人称代名詞を考察することを断念し、テキストの他の部分、すなわち、文末語尾の丁寧度との関連に着目して分析を試みた。日本語・朝鮮語ともに、人称代名詞と文末語尾の丁寧度との間に相関関係が観察されるが、日本語に比して朝鮮語の人称代名詞の各語はカバーする文末語尾の丁寧度が広いことを報告した。

第5章では、対馬歴史民俗資料館に所蔵される『信使并譯官聘問之次第（仮題）』の附「韓語覚書」の母音と子音の朝鮮語カナ表記について調査・考察をおこなった。

一体カナで表記された朝鮮語の資料は、ハングルで表記された本国資料からは窺い知れない音韻・音声的情報を伝えることがあり、従来から「全一道人」、「朝鮮語訳」などの朝鮮語カナ表記資料が朝鮮語および日本語の音韻史資料として利用されてきた。ここに取り上げる「韓語覚書」もそれらの既存資料に匹敵する資料的価値を有するものと予想されるが、本章では、母音と子音部分の転写システムについて、カナ表記とハングル表記復元形とを対照しつつ検討した。

如上の本論文の考察により、「隣語大方」の言語資料的価値を一層明らかにするとともに、新資料「韓語覚書」を学界に紹介することにより、近世期日朝対訳資料の研究にわずかながらも一歩を進めることができたと考える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (金 文 姫)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 岸田 文隆
	副 査 准教授 小西 敏夫
	副 査 教授 塩谷 茂樹
	副 査 准教授 植田 晃次
	副 査 教授 (京都産業大学) 朴 真完

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世期の日本語と朝鮮語の対訳資料、とくに江戸から明治にかけて日朝両国において最も広く用いられた資料のひとつである「隣語大方」について、文献学的考証と言語学的分析をおこなったものである。

まず、第2章で、近世期におこなわれた日本語および朝鮮語の対訳資料、とくに日本の対馬および薩摩苗代川において成立した朝鮮語学書について概観し、「全一道人」、「朝鮮語訳」、「交隣須知」、「隣語大方」、「講話」、「物名」、「韓語覚書」、「韓語訓蒙」、「漂民対話」、「惜陰談」、「和韓問答」、「韓讀集要」、「対談秘密手鑑」などをとりあげ、その書誌的事項と先行研究について確認している。

つぎに、第3章では、近世期の日朝対訳資料のうちから「隣語大方」をとりあげ、その所拠資料たる「韓讀集要」との照合を通じて、文献学的考証をおこなっている。まず、「韓讀集要」について、歴史記録類との照合を通じて、所収書簡の成立年や発信者等の考証を実施し、「韓讀集要」の文例にあらわれる「対馬島失火」「天銀事」等の事件や「敏甫」「子淳」等の人物名を手掛かりに、その文例の成立年、発信者等を明らかにしている。つぎに、「隣語大方」と「韓讀集要」の文例を逐一照合して、すべての対応例を明示し、「隣語大方」巻4(朝鮮刊本)の文例の多くが「韓讀集要」に由来するものであることを指摘している。この章は、本論文において最も評価できる部分で、従来未解決であった「韓讀集要」の文例の成立過程や、「隣語大方」の文例の歴史的淵源の一部を解明したことは、特筆大書すべき学問的貢献と言える。

つぎに、第4章では、「隣語大方」の言語学的検討として、日本語および朝鮮語の人称代名詞、とくに一・二人称代名詞の使われ方を、文末語尾の丁寧度との対応の観点から分析している。その結果、日本語に比して、朝鮮語の一・二人称代名詞の各語はカバーする文末語尾の丁寧度が広いこと、日本語の一・二人称代名詞は、朝鮮語の一・二人称代名詞より、その種類が多様であること等の指摘をおこなっている。

さらに、以上の「隣語大方」に対する研究の補編として、従来学界に知られていなかった新資料「韓語覚書」をとりあげ、文献学的考証と言語学的分析を加えている。この新資料は、対馬歴史民俗資料館に所蔵される『信使并譯官聘問之次第(仮題)』に附として収録されたもので、元禄9年(1696年)ころに成立したと見られ、そのカナ書き朝鮮語からは当時の朝鮮語の音韻・音声的状況が知られるものと期待される。考察の結果、本書が、「全一道人」や「朝鮮語訳」などの既存の朝鮮語カナ表記資料とおおむねは類似した傾向を示す一方で、子音の部分では「ㄷ(d)」口蓋音化を過剰訂正した特異な例も散見され、朝鮮語東南方言の特徴を顕著に示す独自性も有することなどを明らかにしている。

なお、本論文の末尾には、資料編として、「韓牘集要」と「韓語覚書」の全テキストの翻刻・和訳・注釈が付されている。極めて難解な両資料を正確に解読した力作であり、この分野の研究者に信頼できる重要資料を提供するものである。

本論文は、如上のとおり、「隣語大方」の所拠資料たる「韓牘集要」との照合により、文例の成立過程を明らかにした点、新資料「韓語覚書」を学界に紹介した点において、近世期日朝対訳資料の研究を一步進めることに成功した。「隣語大方」の文例がときに文脈が分明でない場合があり、使用されている人称代名詞が二人称であるのか三人称であるのか判然としないことがまれにあるため、第4章の議論は必ずしも明瞭とは言い難い、論文に誤字・誤表記が散見される等の問題点が存在するが、かかる欠点を勘案しても、学術的に高く評価できる。

以上の点から、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。